

工学研究科長に就任するに当たって

静岡大学大学院 工学研究科長 佐古 猛

静岡大学工学部・工学研究科は、ものづくりを基盤とした人材の育成、地域とともに世界へはばたく研究、地域社会・産業への貢献を目指して、教育、研究、社会連携に積極的に取り組んでいます。そしてその目標を達成するために、平成 25 年度から新しい工学部・工学研究科がスタートしました。新しい工学部・工学研究科では、これまで多くの実績を上げてきた工学部の機械工学科および大学院の機械工学専攻、電気電子工学科および電気電子工学専攻、大学院だけの事業開発マネジメント専攻に加えて、新しい学科・専攻として、電子材料やエネルギー材料について学ぶ電子物質科学科および専攻、環境とバイオ工学を学ぶ化学バイオ工学科および専攻、人と環境に優しいシステム作りを学ぶ数理システム工学科および専攻ができました。

組織の変更後の学生定員は従来と同じ工学部 535 名、工学研究科 262 名です。今回の組織改革では、電子物質科学科や機械工学科の光電・精密コースに代表されるように、将来大きな飛躍が期待される融合分野を学ぶことが出来る学科や学科内のコースの新設、あるいは化学バイオ工学科のバイオ応用工学コースのように、今まで静岡大学になかった新しい分野を学ぶことが出来るコースの新設を行いました。またバイオの分野では、これまで工学部にあまり関心を持っていなかった女子学生の入学の促進効果も期待しています。そして新しい工学部・工学研究科では、今後ますます複雑化する複合的な問題に果敢に取り組むことが出来るように、自分の専門分野をしっかりと学ぶと共に、他の工学分野の基礎も興味を持って学び、工学全般を把握できる力を養います。更に学生時代に得た知識や技術だけでは社会の様々な問題に対応するには不十分なので、卒業・修了後において、自ら学び自己発展できる人材になるように教育を行います。

社会が大きく変わり、激動の時代に入中、工学部・工学研究科は優れた人材の育成、新しい産業の創成につながる研究の推進、地域の課題の解決への積極的な取り組みを進めています。工学部・工学研究科のある静岡県西部地域には、新しいことに積極的に挑戦することを示す「やらまいか」という言葉があります。この地域は「やらまいか」精

神のもと、トヨタ、ホンダ、スズキなどの創業者を排出し、日本の自動車産業を初め、製造業全体を牽引してきました。その中で、工学部・工学研究科を卒業した研究者や技術者は中心的な役割を担っています。NHK テレビのドキュメンタリー番組「プロジェクトX」では、工学部・工学研究科の卒業生の活躍が13回も紹介されました。静岡大学は、おそらく全国の中で最も多く取り上げられた大学の一つです。

静岡県は東京と名古屋という大都市圏の間にあります。県内の企業は持ち前の「やрмаいか」精神で自分たちの技術を磨き、両方の大都市を自分たちの有望な市場にしてきました。工学部・工学研究科も大都市の大学や近隣の大学に勝る強みを身に付けるために、「ものづくり」を中心にすえて、実学（実社会で必要な学問）重視の教育や研究を発展させてきました。その根源は、静岡大学工学部の前身である浜松高等工業学校（大正11年に設置）における高柳健次郎先生によるテレビジョンの開発にさかのぼることが出来ます。この間の努力の結果、工学分野の中の12の有望な研究領域で全国トップ10に入り、民間企業との共同研究の数では全国929大学の中で23位、特許の実施件数では24位にランクされています。

また学生の就職についても特筆すべき成果が出ています。日本では就職氷河期あるいは超氷河期と呼ばれる、学生にとって就職するのが難しい状況が長く続いています。そのような状況下においても、この10年間の工学部の就職率は94%以上、工学研究科は97%以上を維持しています。また2011年には、全国の理系の学部の中で就職率16位と非常に高い評価を受けました。このことは受け入れ先の企業が静岡大学工学部・工学研究科の卒業生を高く評価し、卒業生もこれに応じて立派な実績を積み上げてきたからです。

私達は今後とも、「ものづくり」を中心にすえた実学重視の教育を発展させ、多くの産業分野のイノベーションを担う研究者や技術者の育成を進めていきます。「工学を学ぶならば静岡大学」を合言葉にがんばっている静岡大学工学部・工学研究科を、今後ともよろしく願います。